

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿 2月8日（金）放送分

テーマ「奄美歳時記」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。県立奄美図書館です。今週のこの時間は，今年度第11回目の，シリーズ「奄美歳時記^{さいじき}」をお送りします。

「奄美大島の山林などで，リュウキュウアサギマダラが集団越冬を始めている。」という記事が1月初めの新聞に掲載されました。

リュウキュウアサギマダラは，青と茶色のまだら模様が美しい，体長が10センチ位のチョウで，奄美大島が生息地の北限であるといわれています。そして，気温が15度以下になる12月から2月にかけて，風当たりの弱い林の中などで集団越冬する姿が見られます。

このリュウキュウアサギマダラについて，奄美大島に住む作家，鳥飼^{とりかい}否宇^{ひう}さんは著書「群れる！昆虫に学ぶ集団の知恵」の中で，次のように述べています。

「（前略）集団越冬している沢に足を踏み入れると，数十，ときには数百の驚いたチョウたちが，一斉にふわふわと飛び立ちます。繊細なステンドグラスのような羽に陽光を浴びて辺りを乱舞するさまは，極楽浄土の光景かと思うほど幻想的なものです。こちらでは死者の魂はチョウになって，ネリヤカナヤ（海の向こうにある浄土）へ旅立つと信じられています，この光景を目にすればそれも納得できます。」

昆虫が集団越冬をするのは，温度と湿度を保って環境を整えたり，大きな集団になることで鳥などから身を守ったりすることができるからです。しかし，リュウキュウアサギマダラの集団越冬については，それほど大きな集団にならないということから，その効果がどの程度であるのか，わからないことが多いと，鳥飼さんは記しています。

また，リュウキュウアサギマダラより一回り大きく，後ろの翅^{はね}が褐色であるアサギマダラは，壮大な渡りをするチョウとして知られています。

2005年11月の新聞には、「^{ざおう}蔵王のチョウ，奄美大島まで」という記事が取り上げられました。8月には山形で見られたアサギマダラが，10月には1600kmも離れた奄美大島まで飛んできていたのです。

昆虫好きで知られている作家，北杜夫さんは，「どくとるマンボウ昆虫記」の中で，アサギマダラについて次のように書いています。

「南国のキラキラする^{ぐんじょう}群青の空，その下にひろがる更に色濃い^{おおうなばら}大海原，そこを何万という蝶の^{むれ}群があるいは高くあるいは低く，ときには白く泡立つ波頭に^{はね}翅をふれるようにして移動してゆく。マダラチョウはおおむね南方産の蝶で，その色彩も常ならず鮮やかである。日本内地に^{ただいっしゅ}唯一種いるアサギマダラにしてもフェアリーそのままの優雅な蝶だ。そうした美しい蝶の大群が目ざしてゆく遙かな水平線に，^{やし}ぼおっと椰子林の茂る南の島の^{しんきろう}蜃気楼がうかびあがるのだ。」

アサギマダラは，越冬のために，秋に暖かい南の方へ移動し，春には繁殖のために，北の方へ移動するのです。そして，翅が防水性に優れていることなど，アサギマダラについての研究は進められています。しかし，渡りについては，気流を利用して飛んでいるのか，渡りの方向をどのように決定しているのか，渡りの途中で休んでいるのか，島伝いに渡って行くにしても，波の上で休むことができるのかなど，まだ分からないことがたくさんあるようです。

世界自然遺産への登録実現を目指し，奄美群島の国定公園化に向けた取組が進められています。新聞などにおいても，身近な自然のすばらしさが数多く紹介されています。その時に，奄美図書館の図書も参考にさせていただくと，自然の不思議さ，奥深さなどを感じ，新たな価値を見い出せるかもしれません。

以上，県立奄美図書館でした。